

重度失語症への有効な声掛け

新天本病院 言語聴覚士 篠原由布子

【はじめに】

脳梗塞患者、特に失語症者とのコミュニケーションは、重要性は高いものの特にその重症度によっては大変難渋するケースも存在する。一般的に、重度失語症者は声掛けに対し、文そのものではなく状況を頼りに理解している節がある。その特徴は SLTA（標準失語症検査）の結果でも証明されている。今回失語症者における文法検査結果を分析した結果、上記特徴に追従する結果が得られた。さらに今回、特に重度失語症者における効果的なコミュニケーション方法を考えていきたい。

【方法】

対象：脳梗塞により失語症を生じた 26 例。SLTA（標準失語症検査）により重症度を、重度群、中等度群、軽度群に分類。重度群 6 名、中等度群 7 名、軽度群 13 名

上記対象に J-COSS（日本語理解テスト）を用い検査を実施。テストは文法項目 20 項目（単語、受動文、否定文、修飾文など）80 種類の問題から構成され、各項目 4 問あり全て正答した項目は“通過”したこととなる。文法項目の順番は発達段階で獲得する順で並んでいる。評価はそれぞれ聴理解、読解を実施。各文法項目の正解率、通過率を重症度別に比較した。

結果まとめ

聴理解、読解の結果を比較すると明確な差はない。また、軽度群は発達段階に沿った誤り傾向を認めるが中等度群、重度群はばらつきがあり、発達段階の後半で獲得する文法問題で通過を認める。中等度群、重度群の特に通過率の結果に大きな違いはなく似通った結果となっている。

重度群のみにみられる特徴としては、単語レベルの通過率は 100%ではないこと、数詞の正答率が各項目と比し有意に高いことが挙げられる。

【考察】

重度群は単語レベルで誤りを認める一方で数詞といった発達段階の後半で獲得するレベルの理解もされていることが分かった。この特徴は SLTA の結果でも認められる特徴である。これは、重度群が独自の理解方略を用いている可能性がある事を示唆している。つまり、文の中でいくつかの単語を拾い、それらを自身で構成し理解しているのではないかと考えられる。数詞の結果が良いことから、数字はその中でも優先度が高いのではないかと考えられる。

【有効なコミュニケーション提案】

上記結果から有効なコミュニケーションを考察する。

まず、声かけは文レベルで行っても良いということ。さらに、文の中からキーワードを拾っているのでキーワードを文字で書くなど強調すると親切である。また、キーワードのなかでも数字をより優先的に拾う傾向が示唆された為数字も強調して伝えるとより効果的だと考える。